



▲真茅地区のカンマツイ
集落の男性陣が北山神社、ツドン(鶴山神社)、岡ドン(火の神)の3社に注連縄や赤飯、しとぎにお神酒を持参して祀る集落の大事な行事。

民俗の神々を祀る
山の神、田の神、水神、井出神、権現など、民間信仰に根づいた神霊は枕崎にも数多く存在します。そこには、それぞれの地域での暮らしを推測するヒントがあり、歴史上でも重要な意味を持ちます。

二講座 枕崎の歴史 七不思議

牛山さんが主催している「枕崎の歴史七不思議」講演。そこで紹介している歴史の一部を掲載します。どれもどこか懐かしく、しかし新たな発見もある七不思議の世界を感じてください。



▲石製腕輪(楕形石)
〈大阪府大師山古墳出土品〉

▲ゴホウラ貝製腕輪
〈松之尾遺跡出土品〉

**古墳時代のトレンド
ゴホウラ貝製腕輪**

枕崎の松之尾遺跡で久保春信氏によって発見されたゴホウラ貝製腕輪は、発見当時の県考古学会会長だった河口貞徳氏の見解によると、古墳時代の石製腕輪(楕形石)の祖型(モデル)となった形とされています。種子島以南の海でしか採取できなかったゴホウラ貝は貴重だったため、手に入りやすい石で模して作られ、石製の腕輪に変化していったものと推測され、南の島々と本土との交易があったことが分かります。ヤマトの古墳文化の一つのルーツが九州の南の端にあるのは驚くべき事実です。松之尾遺跡の出土品は、市民会館ホワイエに展示してありますので、ぜひご覧ください。

▼立神神社のご神体「大岩様」



▲立神岩が欠ける前はこんな形だった(かもしれない)

火之神公園沖の海にそびえる立神岩は、神秘的で儼かな存在感のある枕崎のシンボルです。江戸期の明和4年(1767年)指宿氏平元陸が当時の鹿籠の様子を記した枕崎初の郷土誌「鹿籠名数記」の中に「西の肩が欠けて海に落ちた」との記述があります。立神岩がもともとローソク岩のような形で、何らかの原因で西の肩が落ちて今のような鳥帽子姿になったと推測されます。また、立神神社のご神体は「大岩様」と呼ばれる石であり、欠けた立神岩の西の肩の一部だと考えています。

**立神岩はかつて
ローソク岩だった？**

**受け継がれる
十五夜行事**



▲9月17日、大塚公民館で行われた十五夜行事
白い装束に身を包んだ大人の男性たちは、左右に揺れ、十五夜唄を唄いながら近づいてくる。唄の終わりが綱引き開始の合図となる。

昭和56年に重要無形民俗文化財に指定された南薩摩の十五夜行事は、薩摩半島南部において行われる旧暦8月の十五夜の月を祭る行事で、綱引きなどの特殊な行事を、男の子ども組を中心に集落をあげて盛大に行うものです。十五夜行事は、一般的にはお月見や収穫などに感謝する行事ですが、枕崎では、大塚公民館の「ホプラー」や綱引き、十五夜唄などに継承されています。綱引き後には、綱を円状に囲み、土俵にして相撲を取る地域もあります。子どもが少ない地域もあり、継承が難しい状況もあるかと思いますが、十五夜唄を放送するなど各地域で伝統を守る取り組みを検討してほしいです。

特集

枕崎の歴史 新史実

市内には、長い歴史を刻んできた数々の文化が存在します。近年、新たに確認された史実が、私たちに地域の豊かな歴史と文化の奥深さを改めて感じさせています。

今回の特集では、これらの新史実を紹介するとともに、受け継がれてきた歴史や風習が、どのように現代に息づいているのかを探ります。過去と未来をつなぐ、文化の継承の意義を考える機会にしてみませんか。



枕崎市文化財保護審議会会長
うしやま よしはる
牛山 好治さん(77)

プロフィール

鹿児島県黎明館資料調査収集協力員 / 鹿児島県考古学会員 / 鹿児島県民具学会員 / 20代に枕崎市史編さん事務局に勤務する傍ら、フィールドワークとして民俗学や考古学の調査研究に尽力 / 枕崎の歴史七不思議をテーマに、市民等に向けて歴史を広める活動を実施している。

地域に関わる歴史を知って感じてほしい

私は、発見されたものから物事を推理するのが好きで考古学や民俗学に興味を持ちました。枕崎には、素晴らしい歴史や文化があり、それを感じることでできる史跡や行事なども残っています。しかし、これまでその語り手となってきた先人たちも高齢化し、次の世代への伝承が難しくなっています。生まれ育った地域の歴史は、まさに自分たちのルーツです。ぜひ知って、どう生きるかを見つめなおすきっかけにしてください。

新史実その2 てんちくんしんし 天地君親師

「天地君親師」という文字が刻まれた石灯籠。

「天地君親師」とは、中国戦国時代の思想家「荀子」の最も重要な精神的信仰である。

荀子に関わる有形の資料は、日本では希少なものである。枕崎にどのように渡ってきたのかは調査中ですがまだ解明されていない。



▲上部の四角い穴はろうそく等の灯りをとすためもの

新史実その1 かけぼけ 懸仏

平安中期の神仏習合の思想(神と仏とを調和させ、同一視する思想)に基づいて制作されたもので、壁に掛ける目的で吊り輪を取り付けたものも多くあり、そこから「懸仏」と呼ばれるようになった。

50年前、本市在住の竹中一男さんが湯穴に持つ畑で農作業中に発見したものを専門家に調べてもらおうと、歴史的価値のある「懸仏」であることがわかった。近日、黎明館に寄託される予定である。



正面
▶高さ5cm
重さ50g

裏面

▼裏面に紐を通して壁に掛けるための穴がある

